

田口卯吉の思想への影響

阿部秀二郎

はじめに

田口は、スペンサー追悼に際し、次のような言葉を残している。

「スペンサーは近世の巨人なり。思ふに彼はギリキのソクラテス、プラト一等と肩を比ぶるものなるべし。近世ベーコンありと雖も余は其の人となりを卑む。ケスネー、アダム・スミス、マコーレー、新井白石、アウガスト・コムトありと雖も余は、スペンサーが彼等に比して一頭地を抜けるを見る。」(田口(二) 621 頁)

このように、田口によるスペンサー評価はとても高い。確かに当時スペンサーブームが日本に存在したことは事実であろうが¹⁾、田口において評価されている他の思想家であるケネー、スミス、白石、コントなどが田口に与えた思想的刺激を踏まえた上で、スペンサー評価も考慮されなければならないだろう。

古賀(2001)によると、森鷗外は田口卯吉を「二本足の学者」と評した。田口が西洋学問と東洋学問の両方の足で立っているという解釈である(131 頁)。しかし西洋の偉人は田口の上の引用文からも複数確認できるが、東洋の偉人は白石が挙げられているのみである。小島(2013)によると、白石は「朱子学者であったから」西洋の学問にも開明的であったとされるように(78 頁)、白石自身の考え方には西洋的なものが混入しているとすれば、白石の影響を受けたであろう田口の二本足はかなりの部分が西洋の影響を受けていると考えることができる。

次に、熊谷(2006)によれば、田口は1893年ころに、自らの経済学の定義を修正していったとされる(74 頁)。田口は、それまで人の手が加わらない自然そのものを対象とする自然科学との対比から、「人為的現象」を経済学は対象にするものであるとしていたが、乗竹孝太郎との論争などを通じて、マクラウドにおける経済思想の三分類(ケネーらの実物的な重農主義、スミスらの労働が価値を生み出す労働価値説、対象にはサービスを含み、相互需要に基づく交換価値説)において第三のグループであるマクラウドに近づき、経済学は交換現象を対象とする

1) 山下(1983)によれば、スペンサーの翻訳書は、ミルやベンサム(の翻訳書)の数を上回っていた(6 頁)。さらにスペンサーの思想受容の問題とともに、山下が指摘する小泉八雲におけるスペンサー思想の影響、そして小泉の日本観におけるスペンサー思想の影響など、当時の西洋における日本観の問題はその後の日本の近代の展開においても重要なテーマであろう。

ものであると認めるようになる。

「此篇説く所は、嘗て余が經濟學は孤獨の生涯即ちロビンソン・クルーソーの場合にも及ぶと云へる語とは、矛盾する者也。」(田口 (三) 323 頁)

このように、田口は自身のそれまでの定義が矛盾すると一時期は考えたが、その後それが必ずしも矛盾しないと考えるようになる。

「英國のマッククラウド等は、佛のコンデラックを祖述して、之を交易の學若くは價格の學と稱せり。…彼のロビンソン・クルーソーの如く自ら耕して食ひ、自ら掘りて飲む所の人民は經濟學の範圍外に居らざるを得ず。…人の天性と地方の形勢とは、人々をして自ら一物を製造し、互に交易して其需要を満足することを便利ならしむるが爲に、交易は發することなり。故に余は、價格の科學と云へる釋義に於ても、其範圍の尙ほ狭きことを感ずるものなり。」(田口 (三) 345 頁)

本稿では、田口卯吉における西洋思想と東洋思想の影響、並びにそれらの影響を受けながらも田口が自身の一貫した思想を展開したことを明確にする。

次の構成となる。

1. では、先行研究も踏まえながら、田口の科學方法論を掘り下げる。2. では、スペンサーの田口への影響について展開する。3. では田口の思想への東洋思想、特に朱子学と老莊思想について展開する。

1. 田口の科學方法論

既述した熊谷(2006)で指摘されているように²⁾、田口卯吉の經濟思想は政府介入による保護貿易を否定し、自由貿易を尊重する。さらにその思想は修正変化することがなく一貫していた。

その一貫性の根拠について3. でもさらに触れるが、ここでは田口の經濟学方法論の特徴に求めることができることを指摘する。

田口の經濟学方法論を分析する際に、想起されるのはスミスの經濟学方法論である。馬渡(1990)によれば、スミスは生涯に書き残した自身の著作物を、死後に燃やすように友人のブラックに依頼しているが、『天文学史』はその対象から外れており、何らかの意図があったとき

2) 熊谷(1990)、熊谷(1991)も参照。

れている。そして馬渡は、天体の運行を重力という唯一の原理に基づいて説明するのと同じように、経済学では利己心という原理で経済活動を説明しようとしたとしている。

田口は、「歴史は科学にあらず」という論文において、一般的に学問とされているものをまず科学（サイエンス）と術（アート）の二つに大別し、さらに科学（サイエンス）を次のような二つに分ける。1) 法則を有していない「叙述學」。2) 法則を有している「説述學」。

このうち術は田口によればアプライド・サイエンスとされ、具体的には航海学・測量学・鉱山学・医学・銀行学・財政学が想定されている。

「財政學杯と云ふものも學問と云ふよりは寧ろ方法を示したもので特別な一の學門ではない。抑も財政上に於て自然の法則が行はれて居りますか、太陽の周圍を地球が廻る如きとが財政の上にありますか…」(田口(一) 10 頁)

「叙述學」は具体的には、地質学、本草学、解剖学などであり、「自然の有様を其儘書いて置く」ものであり、「説述學」は具体的には、天文学、物理学、化学、経済学、社会学、心理学などであり、「法則と云ふものを説明する」ものであり、法則とは「原因と結果」を意味する。天文学とは「宇宙に…幾萬年続いて居るか知れない…法則を説いた」学問とされている。同様に経済学とは需要供給の法則のように「…道理は、何所でも行はれて居て違ひはない」ものを説明する学問とされる。

このように学問を分類し外延的に田口が説明する中で、そのうちの科学（叙述學・説述學に）についてその内包的な三つの条件を提示する。

- 1) 「原則の普及」
- 2) 「原則に順序を立て、置かなければならない」
- 3) 「原則が單純でなければならない」

それぞれに、次のように言い換えることができる。

- 1) 法則は普遍的である。
- 2) 諸法則は推移的に説明されなければならない。
- 3) 因果法則はシンプルでなければならない。

田口がこの文脈の中で科学の例として挙げるのは、天文学と経済学である。一方比較されるのが歴史である。³⁾ 歴史では古今東西における現象の出現において法則化が不可能であり、単純な原理から複雑な法則への推移性を見出すことが不可能である。そして歴史の場合には現象

3) 古代ギリシャからコペルニクス・ケプラーを経てニュートンに至る天文学史を紐解くと、確かに田口の指摘はよく理解できる。コペルニクスまでの天動説がいかに普遍的であり、推移的に説明されたことか。その点で1)と2)の条件はある程度満たすことができたとしても、現象の説明のために導入された導円・周転円などの複数の説明原理は、ニュートンの万有引力という単純な説明によって捨て去られることになった。

の出現という結果に対して、その出現をもたらす可能性のある原因はあまりにも多いのである。こうして田口の中では、天文学と経済学は、自然科学と人為科学（社会科学）という違いはあるにしても、その方法論は同一的に把握されているのであって、アダム・スミス、リカードウ、ジェヴォンズへと続く自然科学の方法論に類似していると指摘して良い。

そして、スミスは利己心、リカードウは投下労働、ジェヴォンズは効用に求めることができるシンプルな因果法則を田口は「需要」に求めている。

田口の最初の経済学関係の出版物『自由交易日本経済論』において、次のように述べている。

「天の發する所、日月星辰河海山澤皆是れ自然の現象なり。人の發する所、貨財知識是れ人為の現象なり。…經濟學とは總て此人爲の現象の動靜の法を講ずるの學なり。夫れ天の發する處、限あり。…其世に發現せしむる所のものは、皆自然の現象を勞作考究して其大小輕重を變じ、其得失利害を議し、其需要に應ずべき形狀を得せしむるなり。

…人素より需むる所あり其需むる所以の性を稱して需要と云ふ。需要とは人為の現象を吸引すべき人間の引力なり。」(田口 (三) 5-6 頁)

「引力」という用語が使用されており、天文学・力学との関係を意識した叙述が存在することから宇宙空間のような無時間的な静態を田口は経済学の対象として認識しているように読むことができる。このような認識は、ワルラスのような静態における均衡理論を容易に予想させる一方で、田口は人為現象を有機的なものと認識し、経済学を「社会生理学」と定義している。

「社會は一生物の如く、道路都會は其五官の如く、人口貨物は其血液の如きを思ひ、是等は皆天爲の現象を變じて作り出したる人為の現象なることを思ひ、經濟學は凡て此人爲現象の動靜を支配する法に就て論述する學問なる事を悟らば、余は經濟學の性質酷だ生理學に類似せる事を想了するなり。」(田口 (三) 9-10 頁)

そして経済学が対象とする人為現象の解説はやはり需要から展開するのである。

「經濟現象は天造に始り、人造に成り、周流循環して能く需要に應ず。」(田口 (三) 9 頁)

このような経済社会の人体との類似性に関する認識は、スミス以前のペティの『アイルランドの政治的解剖』を想起させるものである。こうして天文物理学と生理学の両方が経済学に近いという田口の分析はコントやスペンサーの考え方とは異なり、読者を混乱させる。物理学を土台とする機械論の場合、因果関係の連鎖で論を展開していく方法が一般的であるのに対して、生物学を土台とする有機体論の場合、因果法則が複雑に絡みついており、田口自身が述べ

た科学の二つ目・三つ目の条件を満たすのは困難であろう。

しかしながら、田口の中では機械論的な説明と有機体的な説明は「需要」という究極的な原因からの帰結という説明において結びついている。その背景には田口の科学または学問の進化に関する思想が存在する。

「学問の性質」⁴⁾において、田口は学問の進化の可能性を述べるとともに、進化途上にある当時の学問（経済学も含む）の不完全さを提示する。⁵⁾

このことを大きく3点から田口は論じているが、このうち本節の論旨に関係する2点をまとめる。⁶⁾

はじめに、学問の条件としての実証主義である。世の中には不可知世界と可知世界（仏教用語では、冥界と顯界）が存在し、学問が発展して人類の知識が増えることで、不可知世界が可知世界に含まれる可能性を認めながらも、現状においては「五官」を利用して確認でき証拠立てることのできない対象は学問対象から除外されざるを得ないとする。

次に、学問の進化過程におけるあるべき分類方法である。まず可知世界を対象とするという前提に基づいたうえで、帰納的方法によって観察する諸現象に関する法則（「理」）が探求され、個々の分類されたまとまりが生じる（「部族」）。そして分類されたまとまりは、やがて体系化され大きな学問領域に内包される可能性があるが、当時は分類された部族内部での探求が求められる。そしてその際に注意しなければならないのは部族内部において観察対象に漏れないこと、部族間で重複がないことであるとする。⁷⁾

このように学問の性質を展開する必要性を田口が認識していたということは、次のことを意味する。当時の学問（科学）が混乱しており、未整理の状態であるという認識とともに、将来において学問が体系化される途上にあり、現在すべきことは学問内部において観察対象に漏れないか、学問間において重複がないかを探求していく作業が必要であるという田口の認識が存在したことである。

この田口の認識のうちで「漏れないかどうか」は、「はじめに」で挙げた乗竹孝太郎との経済学定義論争に関する田口の見解に垣間見ることができる。具体的には需要に端を発する交換現象である価格現象を解明することが経済学の定義であると田口も認識しながらも、交換の行

4) 『續經濟策』（1890年）所収。田口（三）113-118頁

5) 「經濟論の論法」『東京經濟雑誌』（1884年、226号）では、經濟現象がもたらす利益と不利益について「豫言」できない現状を紹介したうえで、先進的であるとされる天文学、地理学、数学でさえも、未熟である時期が存在したとしている。この論文の主旨は、議論の仕方についてであり、合理的な説明による反論を提示すべきであると田口は指摘する。（田口（三）246-248頁）

6) もう1つは、学問の名称（タイトル）に拘ることで、学問の内容や実態が適切に理解されない可能性を指摘したうえで、名称ではなく内容や実態の重要性を指摘する。

7) 現在利用されているロジカルシンキングにおける MECE (Mutually Exclusive Collectively Exhaustive) 分解の操作と考えることができる。

われない孤立したロビンソン・クルーソーの活動も経済学では内包するとしたことである。田口が、オーストリア学派の経済学の定義として「価値」に関する研究とすること、多くの研究者がその定義に近い定義を与えることから、その定義には一定の真理性があると尊重しながら、もともと田口が定義づけた「人為的活動」という特徴を削除しない理由は、価値の学問と定義づけることで孤立的な経済主体（例えば、ロビンソン・クルーソー）の活動が分析から漏れてしまい、経済学の適切な対象から抜け落ちてしまうからである。

他方の「学問間において重複がないか」については、「学問の性質」から約10年後の1901年の「経済学は心理的^{メンタルサイエンス}科学なり」⁸⁾にある次の田口のことばから紐解くことにする。

「経済書に於て富の釋義を色々に申して居ることは御承知でありませう。…右の如き富を経済學の本尊とするに就いては何人も満足しません。私は嘗て「学問の性質」と申す論題で演説したことがありますが、「学問は一種の性質で押し通さねばならぬものであり、又取除を免さぬものであります。…オルソドックスの經濟學者は「一種の性質を以て押し通さないで、之を生理學で譬ふれば恰も手を切り首を斬り、唯々腹だけで議論をする様な有様であります。」」(田口(三) 394頁)

田口が突き通すべきと考える「一種の性質」は、人々の需要に基づく経済活動が交換活動、生産活動、^{フリアテ}配分へと展開していくというアダム・スミスの構想した自然的自由な流れということになる。一方で古典派経済学者は、自然的自由な流れよりもスミスが提示した「富」という概念の定義について、それぞれの経済理論の整合性を保つために、制約条件を付けていく過程において、それぞれが定義を作り出していった結果、それぞれの経済学が個別に乱立することになってしまっていることを批判しているのである。

この問題の原因の一つにはスミス自身にもあると田口は指摘する。それはスミス自身が実証的な科学としての経済学に、「富」という規範概念を挿入してしまうことで、重商主義段階に考えられていた富は間違っており、本当の富は云々であるという「時勢論」になってしまっているからである。時勢論は科学としての普遍性を有してはいない。

こうしてスミスの経済学における混乱がその後の経済学の混乱の拡大へとつながっていることを田口は客観的に分析している。田口はそのような批判的読解をどの時点から行うようになったのだろうか。田口の思想研究の過程を次章では分析することで、田口自身が目的としていたものを抽出していく。

8) この論文は、日本経済史家でもあり経済思想史家でもあった瀧本誠一による古典派批判、そしてその古典派に土台を置いていると瀧本が考えている田口批判に対して、田口自身が自らの経済学に関するスタンスを提示しているものであり、次のように明確に自らは古典派経済学とは異なると自認していることがわかる。

「私は其名前を付けられる経済學派とは少し違ふのであります。」(田口(三) 381頁)

2. スペンサーの田口への影響

まず、1. の問題への解答を導出する前に、田口に対するスペンサーの影響に関する導入を説明する。

鈴木（1991）によれば、井上薫・渋沢栄一を中心とした開化派官僚によって大蔵省内に作られた翻訳局に尺振八や乙骨太郎乙が講師として参加し、語学教育と数学（簿記）教育がなされており、島田三郎も田口卯吉も参加していた。そして尺が中心になって創設した私塾共立学舎と翻訳局での教育、さらに沼津兵学校とで行われていた教育は尺や乙骨などによって担われており、使用されていた教科書も同じであるということ、また沼津兵学校から翻訳局に尺などが移動するという歴史的事実から、共立学舎へ沼津兵学校から入学する学生も多く、田口もその一人であるとされた。

「翻訳局上級（田口も一人）の生徒たちだけであるが、第一に、ここでも共立学舎や旧沼津兵学校との密接なつながり、および旧幕府関係者の比重の高さが具体的となった」（144 頁（ ）は引用者）

したがって、田口への乙骨・尺の影響の可能性を見ておかなければならない。というのも江戸に生まれ育った田口が討幕後、横浜に移るのも、沼津へ移動するのも、さらにまた東京へ戻ってくるのも、田口と乙骨との私的関係に依存しているからである（鈴木（1991）141 頁）。乙骨・尺・そして中村正直らの偉人は、江戸時代の幕臣であったために、博識者ではあったが、討幕後に新政府に仕えることは難しい状況であったと思われる。中村は当初翻訳局長への就任依頼を固持したし、尺も一度は辞退しながらも、学費を納めなくても学生が学修できるという社会的利益を翻訳局は提示しているということから、局長になり、乙骨らの協力を得ることになる。⁹⁾

2-1. 教育について

中村はミルの自由論の翻訳『自由之理』（1872 年）を、尺振八は日本で最初に H. スペンサーの教育論『其氏教育論』（1880 年）を翻訳している。いずれも自由民権運動に影響を与えたとされているが、スペンサーの田口への一つ目の影響は、この教育論に見出すことが可能であろう。

スペンサーの『教育論』は、1861 年にアメリカで出版され、尺によって翻訳され、伊澤修二

9) 田口は沼津で中村の薫陶を受けており、中村を自分の師と仰ぎ、その清廉な人柄をたたえている（田口（八）406 頁）。田口自身も時の権力者におもねるのではなく、筋を通そうという姿勢を見ることができる。そしてこの筋の通し方が『自由交易日本経済論』を執筆する動機になっていると松野尾は分析している。（松野尾（1996）20-26 頁）

などの影響で「三育（知育・徳育・体育）」論が有名になった。（油井原（2016））

「今の教育家が教育と云へる文字の中に包括する所のもの三あり、曰く智育、體育、徳育是なり。」（田口（二）593頁）

そして田口は「教育論」という論文において、当時の教育の弊について、2点を指摘している。一つ目は読書を中心とした教育になっていることであり、二つ目は初等・中等教育への政府の介入である。このうち後者については、田口がリタバリアニズム（自由主義者）を主張する存在であると認識することで当座の説明は十分であろう。

前者については次のようになる。田口は当時の学校教育が読書偏重の教育になっており教育の目的（1：自立すること、2：1の結果として社会に貢献すること）から実質的に乖離し、学士になる事が目的化されることで、様々な技術を有する職人などの職が軽んじられていることを遺憾であると指摘する。当時知的産業の賃金が低下していると認識されており、需要供給を見据えながら「学校生徒たらんよりは寧ろ徒弟奉公」を父兄に希望する向きがあった。

同様の指摘は「學制論」においてもなされており、次のように指摘している。

「凡て學問なるものは實際施行の際に於て數々經驗したる實驗に過ぎざるものなり、…實驗を輕んじ文學を知るを重するは仰も何ぞや。」（田口（二）585頁）

一方のスペンサーの場合、『教育論』では、教育の目的が論理的に分類される。1：直接的な自己保存に役立つ、2：間接的な自己保存に役立つ、3：市民となるのに役立つ、4：人生を謳歌するために役立つとされており、田口の定義は、スペンサーの4以外一緒であるといってよい。また、スペンサーは科学を重んじ、次のよう結論を導出する。

「それゆえ次のように結論しよう。指導においても鍛錬においても科学は最も価値を持つ。事物の意味を知ることとは言葉の意味を知ることよりも良いのである。知的・道徳的・宗教的トレーニングいずれにおいても、周りの事を学ぶことは、文法や語彙目録を学ぶよりもずっと優れているのである。」（Spencer（1993）p.93）

こうして、田口とスペンサーは、座学によって知識を詰め込むだけの当時の教育に対して批判的に考えており、実験（田口）・科学（スペンサー）によって、学生が自らの置かれた状況を把握しながら、環境に対応できる状態を望ましいものであると考えていた。

2-2. 利己的かつ利他的な人間存在

次の影響は、市場経済システムにおける倫理問題への対策の面での影響である。共立学舎から上梓された翻訳はスペンサーの教育論である『斯氏教育論』（尺振八翻訳）だけではなく、スミスの『国富論』である『富国論』（尺振八校閲、石川暎作・嵯峨正作訳）であった。このように田口の教師である尺などにより共立学舎ではスミスの研究が進められており、田口自身もミスから多大なる影響を受けていることは言うまでもない。

そしてミスからの影響を具体的に言い換えると、政府介入のない自由な交易・通商とそれを実現するための装置としての市場と、利己的な主体と云うことになるだろう。自らの利益を認識している主体が自らの利益に適う方法で交換を行い、価格という信号に基づき生産・分配が展開するという論理である。そして利己心と利他心とをめぐる「アダム・スミス問題」が『国富論』と『道徳感情論』とにおいて描かれている主体の乖離から発生したように、スミスの『国富論』だけを読むと利他的な経済主体は経済活動には登場しないように感じられる。

スミスの場合には『道徳感情論』で描かれている主体が必ずしも利他的存在とは言えず、むしろ利己的な存在として市民社会において共感の原理で倫理が調節的に保たれるという前提にあると指摘してよいだろう。

スペンサー、田口（そしてペイリーやマクラウド）といった自由主義を主張する経済学者の場合には、スミスの共感の原理にもとづく倫理問題への回答のための手段がないことから、倫理的な問題への質問に回答する別な手段が必要となる。そしてスペンサーや田口の手段は人間の「進化」と言ってよいであろう。

『日本開化小史』の第三章「封建の権興より鎌倉幕府創立に至る迄の地方の有様」は、人間の内的規範は生得のものではなく成長に伴い形成されてくるという指摘から始まる。人間は成長することで、功利主義的に善悪を判断することができるようになる。しかし功利主義的に考える際には、自らの利益と他の利益とが通常は対立するものであると認識されていたのに対して、スペンサーは次のように指摘することで利己心が利他心へと昇華し、利己心が利他心と対立しなくなることを指摘したと田口は考えた。

「倫理の情は度々の経験を積んで變性せる私利心なり、蓋し経験を以て其心を懲戒せしむるときは、其神經の構造を變性せしめ之を其子に遺傳し、子亦た之に経験を加へ其性を變ぜしめ其孫に遺傳し、子々孫々如此くにして、終に経験より來らざる一箇獨立の稟性の如く見ゆるに至り、一人の利己心の経験に基かざるが如き念と成れり」（田口（二）25頁）¹⁰⁾

田口はこのスペンサーの議論を展開し、鎌倉時代の封建制度が成立し、強固になっていった背景に、鎌倉武士による忠義という利己的でもあり利他的でもある思想の存在を指摘する。田口の利己と利他に関する問題は、『経済政策』の「自愛及他愛」でさらに展開されることになる。

宗教界では他愛的な考え方が中心的に考えられているという通説に対して田口は否定する。儒教・キリスト教・仏教いずれもが利己的な考え方を否定していないと指摘する。田口の思想の土台には自立的あるいは独立的な人間が理想であるとする考え方が存在している。自愛心と他愛心とが分かちがたく結びついており、独立的（＝利己的）な存在の活動領域が増えるほど、その行為の結果は利他的なものになるという。

「吾人日常の行為に於ては、自愛と他愛とは周密に連合して分離すべからざるなり。唯々人々終局の目的は獨立生存にあることを思へば、其他愛は則ち自愛の精神より發したる一分枝なりと認めざるべからざるべし。」（田口（三）163頁）

2-3. スпенサー（社会学）批判

1. で指摘した「歴史は科学にあらず」は歴史学の専門家による学会「史學會」での講演である。この講演で田口はまずバックルの歴史学観を批判する。バックルは帰納法に基づき、歴史において存在している法則を発見し、展開することに歴史学の意義を見ていた¹¹⁾。田口は科学としての条件を満たすために必要な法則の普遍性を歴史学方法論は確保できないという理由で批判するわけだが、この批判は同様に他の科学的学問にも向けられる可能性を有するものである。その具体的な対象の一つが社会学である。

田口によるスเปนサー批判は科学的方法論としての帰納的方法の不完全性に向けられているといつてよいであろう。

田口にとって科学は普遍的法則を備えていなければならない。さらに経済学・社会学などの社会科学は、経済・社会に関する普遍的法則を備えていなければならない。普遍的法則は時空を超えて成立する必要がある。さらにその法則を確認できなければならない。歴史は帰納的に仮説を作ることはできても実験が行えないから普遍的法則を有する科学とは言えない。田口の批判点のポイントは上になる。そしてこのような気づきを田口に与えたのは、田口自身の南洋への航行であった。¹²⁾

10) スペンサーの引用文を見いだせていない。引用文のすぐ後にラボック（Lubbock, J.）の『開化始源論』（Origin of Civilization and the Primitive Condition of Man）の該当ページ（270）から、ベイン（Bain, A.）の『精神道德科学』（Mental and Moral Science）において、スเปนサーがミル宛てに出した手紙の中に、「道德的直観は効用の（遺伝的に）蓄積された結果である」と書いている。これは、引用文中に記している内容を彷彿とさせるものである。しかし倫理的な感情が利己心からの蓄積的な変化によって、生み出されていくという表現に近いものは、『心理学研究』の中に見出される。

「利己的な感情から利己利他的な（eco-altruistic）感情へと至る。この名前で意味するのは、自己満足を明確に生み出す一方で、他人の満足をも生み出すということである。この他人の満足は、本質的なものではない快樂であつて、経験がそれと関連する自身にとっての隠されたベネフィットのためなのである。」

（Spencer（1873）p.595）

11) 安西（1982）、浜林（1985）参照。

スペンサーの『社会学原理』の読者（田口も含む）が野蛮人について抱くイメージは、「劣等なる人種にして禽獸と相去ること遠からず」（田口（二）618頁）というものであったが、田口自身が実際にあったパラオの住民は当時の日本人の一部よりも高尚であると田口には認識された。つまり帰納的な方法は不適切で不完全であるということになる。さらにこのような同時期の空間的相違から発展論を展開する上での帰納の問題以外には、時代的に発展してく最初期の段階を社会学は説明できるとしても、より複雑な社会の説明は難しいという問題が解決されていないと指摘する。

「スペンサーの頭で説き明しの出来る丈けの事實より外は、所謂人間社會に廣く及ぼす道理を説明してないです。…もう少し進んで來た封建時代或は其以後の社會に行われて居ることを説き明すことは出来ない。…何となれば社會には種々なことが行われて錯雜して居る故なり。」（田口（一）13-14頁）

歴史学者に対する講演の締めくくりとして、田口は法則でなく「事実」を扱う学問としての歴史学の高尚さと重要性を指摘する。社会学は法則（理）を古代社会など原始的な時代の事実などから帰納的に導出できるが、複雑化したより発展した社会を対象とすることはできないのであり、その社会の説明は法則（理）ではなく歴史的になされるしかないという社会学の限界を田口は設定したと指摘できるだろう。

3. 東洋思想の影響

3-1. 朱子学

小島（2013）によれば、田口の利用する「理」または「大理」は、『論語』や『孟子』には存在していなかったが、中国の唐の時代から一般的に利用されるようになり、一般的に使用されていたがゆえに朱熹なども明確に定義は行っていない。そして、仏教では「自性^{じしやう}」の対概念である「理性^{りしやう}」（ものごとの本性・あるべき姿）として伝わっていた。（83-86頁）

田口が利用している「理」は、上の小島の論理と整合している。つまり「理」（もともとは「理性」）は、獲得するための努力を要する「ものごとの本性・あるべき姿」であり、その大本である「大理」は森羅万象を支配するものであり、それを把握することに科学の使命があると田口は考えていたからである（そうすべきという規範に立ち入ることを回避していることは1.で指摘した）。この点で、田口の方法論または思想は朱子学の系列にあると考えてよいであろう。

✓ 12) 明治23年（1890年）に、グアム・パラオなどへと出向き、文化人類学的な考察を行っている。（田口（八）520-534頁）

注意しなければならないことは、現存するまたは現実の朱子学者を田口は否定的に捉えているということである。

田口が『日本開化小史』でまとめた徳川の「開化時代」における、朱子学に関する説明の推移は次のように纏められる。

・家光のあたりまで

藤原惺窩の弟子である林羅山が將軍に仕えるが、「程朱の學」が展開している。

・家光から吉宗のあたりまで

幕府成立までの戦いの状況からの解放に伴い、多様な派生的学問が登場する。野中兼山、熊澤蕃山、由井正雪、山鹿素行などの活儒の学者も生まれるが、宋儒（程朱の學）も展開した。水戸学が展開し始める。

・吉宗から家慶まで

当初は徂徠学が人気を博するものの徂徠学が異端視され、力が衰える。一方で、「宋儒學を奉ずと雖も、性理の事に於ては強ひて主張せざるが如し」（田口（二）66-100頁）

最後の部分に「性理の事・主張せざるが如し」とあるように、田口にしてみれば、朱子学は最も重要な部分を継承しない状態に陥ってしまったということになる。

田口は朱子学の最も重要な部分である「理」に拘り、その「理」を貫こうとしていたことは、

1. でも指摘した。そしてその「理」が置き去りにされてしまった学問として、朱子学と古典派経済学が批判されることになるのである。

「アダム・スミスが之を發見して後は人間は之を忘れることはない。經濟の理は決して民約説とか、共和政治論とか云ふ如き流行論でなくして、人間社會に存在する眞理（ツルース）である故に、決して古い説だの新しい論だのということはないのであります。・・而して少々フ印のついて居るミルやフラーセットやケーヤンス（ケーヤンスは餘程勝れて居れども）が之に従事したと云ふ次第でありますから、イギリス學派は終に日本の朱子學派見た様な有様に陥ったのであります。」（田口（三）395頁）

3-2. 他の思想

田口は「經濟策」という論文（1879年）において、老莊思想を紹介し、經濟の眞理であるとしている。

「老子曰治_レ大國_一如_レ煮_二小鮮_一と。莊子曰聞_レ宥_二在天下_一不_レ聞_レ治_二天下_一と。・・古者聖人無爲を以て治道の大本となす。其語疎なるが如しと雖も、其意實に能く經濟の眞理を得たり。」（田口（三）83頁）¹³⁾

スペンサーやヨーロッパの思想で展開した自由主義と東洋思想で展開した無為の思想的な関係性そのものについては興味深いものであるがここでは触れない¹⁴⁾。

老荘思想はほぼ儒教と同じ程度の歴史を有しており、その中心的思想である無為自然は、朱子学概念を利用すれば「大理」ということになる。田口は「社會に大理あり」において、大理が経済的に介入しないという状況であることを示す。そしてその理由は歴史的経験的に与えられていることになる。

「…其改良を希望するの急なるや、遂に…目的に反する結果を生ずるに至る…」

(田口 (三) 118 頁)

田口は、同様に歴史的経験的に大理を見定めようとしていた経済学者としてマクラウドの名を挙げている。マクラウドは『経済哲学の原理』(1872)の序文で、銀行信用制度に関する経済学者の専門的な研究が間違っていることから、その研究に基づいて展開された政策によりイギリス経済は疲弊したと記したうえで、次のように書いており、田口はそれに大変感銘を受けたという感想を述べている。(田口 (三) 85 頁)¹⁵⁾

「〔破壊〕時代が過ぎ去り、＜構築＞時代がやってきたといつてよいかもしれない。幼稚でこれから成長するすべての科学と同じで、今後より多くの考え方や説が修正を必要とする。しかし多くの個別的説が確立され真理は確認されてきたとしても、一般的な概念に基づく一貫した体系には至っていない。…経済学が厳密科学の状態へと入っていくためには必要な努力である。」(Macleod (1872) pp.xi-xii)

マクラウドも挙げている一貫した体系または「理」は、介入が存在しない自由な状態に置かれた自然・社会の動きであることはこれまでの研究や本論でも指摘していることであるが、この「理」という考え方は朱子学に基づき構想されていると考えてよいだろう。そしてその中身は田口自身が書いているように老荘思想にも負っていると指摘できるだろう。一方で、朱子学

✓ 13) ガーラックによれば、老荘思想の無為思想とレッセフェールには歴史的な関係があるということである。(Gerlach (2005))

14) 後藤 (1969), 湯浅 (2015) 参照。

15) このマクラウドの認識から想起されるのが、太宰春台の『経済録』第十卷「無為」「易道」の存在と、それを巡る解釈である。太宰も当時の政策が功をそうしておらず、むしろ様々な問題を引き延ばす方法でよくない事情を生みだしているのだから、老荘思想の「無為」を利用して、いったんはすべてを解き放ちその後の事態収拾を図るべきであると論じた。(篠崎 (1990)), (山口 (2013)) 田口がまとめた江戸時代の情報についても、太宰の「『経済録』等」と書かれていることから、田口が読んでいる可能性も否定できない。(田口 (三) 97 頁)

については田口自身が論理的には宋儒の立場に近いように思えても、江戸時代には多様なものが生じたことから、必ずしも田口のスタンスが明確ではない。さらに、老荘思想への傾倒という点においても朱子学ほどに田口がその歴史的展開を研究しているなどの状況が見つけられない。

結びにかえて

田口卯吉に関する先行研究として、多くはアダム・スミスや古典派と田口の関係を経済思想史から分析していくものである。¹⁶⁾ また近年では田口の歴史研究に重きを置くことで、田口の政治という側面を重視せざるを得ないという観点から分析を行った河野（2013）がある。さらに、古賀（2001）のように、東洋思想も考慮に入れながら田口の思想的位置づけを図るものもある。

もちろんそれ以外にも存在している先行研究を網羅出来ていると筆者は考えていないが、大きな範疇としてはそれらにまとめられると考える。

本研究の成果はそれぞれにどのような貢献を与えうるものであろうか。

まず田口卯吉はスミスを自然的自由の体系という点に於て継承している。また自然科学方法論を田口は踏襲しているといつてよいであろう。したがってこの2点からスミスの影響を受けていることは間違いないが、スミスの経済学に紛れ込んでいる規範的な要素（何を富と呼ぶか、そして経済発展の定義）などは否定されることを明確にした。後者の点は自然科学方法論との類似を意識することでより明確になる。

次に、田口卯吉の社会科学関係の全集における割合で考えると、スペンサーの影響が大きいと考えられた。筆者は教育・利己心と利他心・歴史分析の利用という3点を明確にした。この中で利己心と利他心の問題は、スミスの道徳感情論を土台にしながらも感情の快苦などの調節的機能を説明せずに個人が利他的になっていく理論を田口が展開していることを明らかにした。¹⁷⁾

最後に東洋思想からの影響について、不十分ではあるが、朱子学と老荘思想を提示した。いずれもについて田口への強い影響を内的に明らかにすることは困難であった。理由は筆者の力量不足である。江戸時代の日本における東洋思想の影響を網羅し、その影響の中に於いて田口

16) このような学史研究の方法・解釈にはさらに分析が可能であろう。また、田口がその学史研究の中から利用したマクラウド自身の学史研究もさらなる研究の可能性がある。

17) 本稿では展開できていないが、他にも様々な点でスペンサーの田口への影響を確認することができる。その一つの例として田口が「社会に大理あり」で、ニュートン、ワット、ダーウィン、白石、スペンサーなどの偉人が社会に与える影響を論じる箇所、逆に彼らが社会的産物であり、社会の有機的発展の歴史的段階における偉大な人物と社会との相互作用を説く。この考え方はスペンサーが有する社会的前進的な進化の想定と通じる（阿部（2010）10頁）。

がどのように位置づけられるのかについての把握を行うことは容易なものではない。またそれらを明らかにできるとするのであれば論文では不足する内容である。しかし近代日本の知識人が西洋からどのような経済思想の影響を受けたのか、それはなぜかなどを理解するためには、単に西洋からの経済学を翻訳、解釈した内容を提示するだけでは十分ではないことを鑑みると、彼らにおける東洋思想の研究も正確に行う必要があるだろう。

最後に、本研究の動機づけを振り返りなってみよう。

本研究は、王妙発先生の退職記念を意識して構想したのが出発点であった。中国人考古学研究者の退職を祝するに足るべき論文を経済学史研究者が認めることは到底不可能であるが、それでも何とか筆者の知識・能力の及び範囲で近づくことができるテーマを求めて本論文を構想した。王先生により近づける場合には、管仲や孔孟の経済思想史の展開が可能であったかもしれない。一方で筆者により近づけた場合、マクラウドとジェヴォンズの微妙な距離感に関してそれぞれの背景の持つ限界を抽出することができたかもしれない。

筆者の力量不足を言い訳として、王先生の貝殻を集める活動に今後少しでも筆者自身の範囲内で関わっていきたいと考えている。

参考文献

- 阿部 (2010)：阿部秀二郎「スペンサー進化論に関するジェヴォンズの考察」『研究年報』（和歌山大学経済学会, 1-14 頁）
- 安西 (1982)：安西敏三「福沢諭吉の学問観：ミル、バッケル、スペンサーの諸著作へのノートを中心に」『三田学会雑誌』（慶応義塾経済学会, Vol.75, No.3, 457-470 頁）
- 熊谷 (1990)：熊谷次郎「田口卯吉における西欧経済学を受容」『総合研究所報』（桃山学院大学経済学部, 13-22 頁）
- 熊谷 (1991)：熊谷次郎『マンチェスター派経済思想史研究』（日本経済法論社）
- 熊谷 (2006)：熊谷次郎「第2章 田口卯吉」『経済思想9 日本の経済思想Ⅰ』（日本経済評論社, 45-82 頁）
- 河野 (2013)：河野有理『田口卯吉の夢』（慶応義塾大学出版会）
- 古賀 (2001)：古賀勝次郎『近代日本の社会学者たち』（行人社）
- 小島 (2013)：小島毅『朱子学と陽明学』（ちくま学芸文庫）
- 後藤 (1969)：後藤末雄『中国思想のフランス西漸』（矢沢利彦校訂, 平凡社東洋文庫）
- 篠崎 (1990)：篠崎英二「第二章 近世経済思想の展開 第一節 為政者的経済論の登場—太宰春台」『日本の経済思想四百年』（杉原四郎・逆井孝仁・藤原昭夫・藤井隆至編著, 日本経済評論社, 94-100 頁）
- 鈴木 (1991)：鈴木栄樹「第二章 開化政策と翻訳・洋学教育：大蔵省翻訳局と尺振八・共立学舎」『近代日本の政治と官僚』（東京創元社）
- 田口 (一)：『鼎軒田口卯吉全集』第一巻（鼎軒田口卯吉全集刊行会）
- 田口 (二)：『鼎軒田口卯吉全集』第二巻（鼎軒田口卯吉全集刊行会）
- 田口 (三)：『鼎軒田口卯吉全集』第三巻（鼎軒田口卯吉全集刊行会）
- 田口 (八)：『鼎軒田口卯吉全集』第八巻（鼎軒田口卯吉全集刊行会）
- 浜林 (1985)：浜林正夫「H.T. バッケルの『イングランド文明史』」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』（一橋大学社会科学古典センター, 5, 4-8 頁）
- 松野尾 (1995)：松野尾裕「13 田口卯吉と経済学協会」『田口卯吉と東京経済雑誌』（日本経済評論社,

417-461 頁)

松野尾 (1996) : 松野尾裕『田口卯吉と経済協会：啓蒙時代の経済学』(日本経済評論社)

馬渡 (1990) : 馬渡尚憲『経済学のメソドロギー』(日本評論社)

湯浅 (2015) : 湯浅邦弘『入門 老荘思想』(ちくま新書)

油井原 (2016) : 油井原均『スペンサー『教育論』と伊澤修二『教育学』の内容について：両者の「三育主義」と心理学的立場の異同を中心に』『白百合女子大学研究紀要』(白百合女子大学, (52), 119-134 頁)

山口 (2013) : 山口直樹「太宰春台における経世論の転回 (田中秀夫教授記念号)」『経済論叢』(京都大学, 186 (3), 79-96 頁)

山下 (1983) : 山下重一『スペンサーと日本近代』(御茶ノ水書房)

Gerlach (2005) : Gerlach, C, *Wu-Wei in Europe. A Study of Eurasian Economic Thought*, Working Paper of the Global History Network, No.12/05, Department of Economic History, London School of Economics, pp.1-44

(<http://eprints.lse.ac.uk/22479/>, 03/30/2018)

Spencer (1873) : Spencer, H. *The Principles of Psychology* Vol. II, New York

Spencer (1993) : Spencer, H. *EDUCATION: INTELLECTUAL, MORAL AND PHYSICAL*, New York

謝辞：論文に目を通していただき、適切な忠告を頂いた論文編集委員にお礼申し上げる。

Influences to Taguchi Ukichi's Thoughts

Shujiro ABE

Abstract

Taguchi Ukichi is famous for the particularity of his libertarianism. He was the first publisher of the professional economic magazine in Japan and he established private companies. And he was famous for his consistency of economic thoughts. While a few researchers have studied and analyzed his contributions to the history of economic thoughts, this has not been considered properly. Ukichi's economic thoughts should be considered from the following viewpoints: methodology, relation to H. Spencer, and the eastern economic thoughts.